

Title	教育史上の自然主義
Sub Title	
Author	石田, 新太郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.4 (1910. 4) ,p.463(97)- 469(103)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100415-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

た。その留守中に、オランダの總督オランジウ公モリス(ウイレルム二世の子)が、連りにネーデルラントで勝を得た。かように一方を押へれば一方が起るので、イスパニアは奔命に疲れるのみで、實力が不足する。その中バルマ公が死んで、これに代るべき名將がない。されば千五百八十八年六月頃には、イスパニアの目的が九分九厘まで、貫かれかゝつたのに、七月末に大艦隊の遠征が不成功に終ると、萬事が破壊されて仕舞つたのであります。イスパニアは新教撲滅が行はれなくなつた許りでなく、自國が物質的及び精神的に衰弱し始めたのであります。

一方にフランスはますます盛んになり、後ルイス十四世時代には、ヨーロッパを壓するやうになりました。また一方にイギリスとオランダとは、これより海軍上に大發展をしたのであります。特にオランダは、イスパニアに代つて、一時海上の霸王となり、イスパニア、ポルトガルの領土をドシ／＼奪取りました。イギリスは海軍上初はオラ

ランダに及ばなかつた、烈しくこれと競争し、終にはオランダを凌駕し、フランスを壓倒し、十九世紀の世界政策を殆んど獨占したことは、講演の初に申した通りであります。要するに大艦隊破滅は、世界の運命を決する大事件でありました。なほ申し残したことは多々ありますが、何分餘り長くありませんから、今日はこれで終りと致します(拍手)。(明治四十三年二月五日慶應義塾史學會に於て)

雜 録

教育史上の自然主義

石田新太郎

本編はモンロー氏教育史の一節を譯したるもの也モンローの教育史は常に英文教育史中の白眉たるのみならず著眼結構の點に於て他に殆ど比類なきの良書と謂ふべし茲には教育史上よりルソーを見て自然主義運動の價値を論じをが後代の教育學説及實際に及ぼしたる諸點を明細に記載したるなり

從來の運動及び當時代と此主義との關係。教育史上に於ける自然主義の運動は其關係の重大にして影響の深大なりし事文藝復興の運動に譲らず、文藝復興によりて發展し來りたる思想即ち「教育は書籍を研究し且つ又諸形式に通達するにあり」との教育概念を打破したるものなり、然れども思想界に於ける自然主義の運動は教育方面の運動に比して遙かに廣大なるものありされば此廣大なる知

識界及社會的方面に於ける運動の真相を明かにして始めて教育界の方面を知悉する事を得べし。

第十七世紀の後部と第十八世紀の大半とに於ては生命なき形式主義宗教道德の方面に跋扈したるが故に之に對する反動として英國に於てはかの清教徒獨逸に於ては敬虔派佛國に於てはジャンセン派の發生を來たせり、然れども此等の運動は何れも其理想高きに失し之れを實現する事能はざりしがため、自ら亦形式主義に陥りたり、是に於て文學及社交上に偽善的言辭頻りに流行し、之れが反面には輕跳浮華の氣風駭々として蔓延せり、佛國に於ては政府社會再び昔日の勢力を保全し、國民の思想行爲の上に最も酷烈なる抑壓を加へ、皇帝又は社會の權力に對して疑問を挾むものは迫害及異端審問の法によりて所討し、所謂邪道に流るゝものを戒めたり、貴族は亦正教の教義に對して最も深厚なる忠義を盡し之れによつて赦罪の恩典を蒙りぬ、壯嚴なる儀式華麗なる外飾によつて道德の腐敗内面の邪惡を覆蔽し社會の儀式を嚴にし、盲

目的假偽的の正教を稱へ、却つて益々偽善を廣め且つ隱密冷笑的の懷疑思想を發達せしめたるのみならず、第十七世紀に於ける佛國は當時第一等の國民にして第十八世紀の初年に至るまで勢力の赫灼たる、恰もリクルス或はアウグスタスの時代の如く壯觀を呈したり、然れども巴里の榮華は州縣の疲弊により國王の權力は國民の奴隸によりて購ひ得たるものにして、戰爭に於ける成功は國內の貧弱を意味し貴族の奢侈はやがて平民の膏血なりき、正教の權力を維持したるものは絶對的に個人的判斷を抑制したる結果にして貴族をして教會の味方たらしめたるものは、不正なる特權と腐敗せる生活とに在りき。

專制主義は政治宗教思想行爲等あらゆる方面に現はれたりと雖も早晩反逆の首領を俟つて瓦解すべきものなりき、而して其首領たるべき人材は第十八世紀に至つて現はれたり、第一の謀叛は抑制に對する知識界の謀叛にして通常之れを呼んで啓蒙時代と稱す、第二は平民の權利に對する庶民の

謀叛にして自然主義的運動之れなり、此二運動は思想の方面に於ては共通の點多きがために、屢々混同せらるゝも然れども形式主義或は貴族政治の如き根本主義に於て兩者の間自ら大なる差別あり茲に其大略を記述すべし。

「啓蒙」は人間自由思想の發展上最も注目すべき一進歩なりと雖も其結果は一の形式主義に過ぎざりき、此の第十八世紀の形式主義は從來の形式主義の敬神的なりしが如く、唯物論に傾き又前者が宗教的儀式的なりしが如く、懷疑的唯理論に傾き、前者が民主主義なりしが如く、後者は貴族的に傾きたり、第十八世紀道德の標準は形式を守り外觀を修飾するに在りしが故に、當時の文學が示すが如く、當時は最重大なる罪惡をも觀過したり清教及び祇虔教の所爲を目しては偽善となし、宗教をば迷信となし明かに汎神論或は懷疑派と化し去りたり、英國に於てはヒューム及びギボン佛國に於てはヴォルテア及び百科學者の徒、皆如上の立脚地より人生を解釋しぬ、「啓蒙」は其根源に於

て當時の思想信仰の上に横はれる形式主義前に教會の專制主義に對する反動なりしが、一轉して教會國家社會の階級制度と苛政とに對する反抗となり、思想界に於ては迷信と無智とに對する謀逆となり、道德上に於ては偽善に對する反動となれり、然れども自由の反面を尋ぬれば社會の方面に於ては無政府主義の潜めるあり、思想界に於ては汎神論と懷疑、道德上に於ては放逸亂墮に流るゝを禁ずる事能はざるものなり、此運動の當初は人間の理解力と理性とを完全無缺なる根本的原則となし古代の弊習に反對し、思想界と言はず政治上と言はず道德上と言はず、凡て專制的臭味を帶ぶるものは全然之れに反對し、終には之等の權力の伏在する、あらゆる社會制度の基礎殊に教會と政府とに突撃を試み、かくて鞏固健全なる社會を成すべき要素をも根絶せんとする勢を示したり、而して人生の眞價を現はし人間の幸福を獲得するものは獨り人間の理性あるのみと斷言するに至りぬ。

啓蒙運動の目的は自然に反せる暴政の軌より人

心を解放し、教會及社會の形式の爲めに拘束せられざる個人の道德的人格を舒暢し、人間の知識と能力とを充分に育成し、感情思想行爲の上に及ぼしたる教會王政の暴虐を除去するにありき、又啓蒙は個人の理性、國家の正義、信仰の自由、政治運動の自由、及び人權に對して無上の信仰を捧げたり、去れば此時代を貫ける一大勢力は貧人の特權、個人的判斷を重んじ教會の迷信或は社會の習慣等に拘束せらるゝ事なくしてあらゆる問題を自由に解釋するの權利を熱望したるにありき、是に於て思想の自由、良心の自由並に處世に對する理性の充實等の語は第十八世紀に於ける、思想界運動の鍵鑰なりき。

然れども啓蒙は又其の反面を有したり、ヴォルテア及び第十八世紀の上半に於ける、ヴォルテア一派の論者は自ら貴族に反對したりと雖も、又自ら特權を有せざる貴族たるの弊に陥りたるものなり、彼等の主張する處に曰く下等社會なるものは終に理を以て律すべからざるものなり、教育を施

すべからざるものなり、又彼等は野蠻を離るゝ事遠からざるものなり、故に宗教は彼等にとりて始めて立法的効果を有するものなりと。

本世紀の初年に於ける思想界の運動は、唯理論的なりしが故に従つて貴族的なりき、其目的とする處は少數人士の修養と、社會經濟の任に當れる人士の間に蟠屈せる偏狹なる因襲と獨斷主義とを一掃し、教育ある階級の間理性を重んぜしめんとするに在りき、故に舊來の門閥地位及び教會の貴族政治に代ゆるに、智慮と資力とを有する新貴族政治を以てせんとしたるものと云ふべし。

舊來の貴族政治の狹隘魯鈍なるに反し、新貴族政治は賢明穎智にして光輝を放ちたりと雖も、之れ單に少數秀拔の人士のことにして、暴虐なる惡政の下に抑壓せられたる庶民の爲めには何等の恩澤をも及ぼすことなかりき、啓蒙運動は思想の方面に於ては、暴政と抑壓とに反對したりと雖も又自ら社會及び政治上の特權を擁護せざるべからざる多數人士の眼には其正義にあらざる事を示した

り。

故に此の初年の知識界の運動は利己主義の冷淡に陥り懷疑的となり、優美にして人工的な社會の堂々たる形式主義と化し去りにき、而かも此等が皆合理的なりしは疑を容れざる處なりと雖も、其人工的なりしが故に自然的生活と相隔離し、其世界主義なりしが故に國民的地方的の感情を銷滅したり、即ち啓蒙運動の布教は一國に限定せられたるものに非らず、國語にての文學はロック、ポープ及び英國の小説家によりて始めて世界的となりヴォルテア及び佛國の百科學者並に獨逸の哲學者によりて益々世界的となり、今や學識を有する社會は其智慮の優越なるを誇り、簡單なるを以て卑近の標準なりとなし自然的なるを以て、不合理の標準となして之れを斥けたり、祇虔派及び清教徒の道徳が墮ちたる形式主義は、リチャードソンの如き英國小説中に表明せられ、啓蒙運動の形式主義はロードチエスタフィールドの書簡中に見えたる道徳禮儀同情等の概念によりて表明せられた

り、去れば第十八世紀の後年に於ては人心已に兩運動の形式主義に倦怠してルーソーの嚮導を迎へて一新目的に向つて歩み出せしなり。

第十八世紀に於ける思想運動の自然主義的方面。本世紀の央ばに至るまで哲學及「理性」が放ちたる攻撃は主として教會に向ひしが、後半に至りては社會及政治の組織中に横はれる弊害に向つて轉じたりき、即ち當初の目的は現在の弊害を破壊するに在り、後の目的は理想的社會を建設するに在りき、然れども兩運動の間には更に根本的の相違ありて存す。所謂「理性を基礎とせる經綸」なるものは權門の統治に比し其暴政なるの點に於て毫も優劣なき事を明かにしたり、故に自然主義の見解は當初の合理的信念に反し、吾人の知覺は必ずしも信頼すべきものに非らず、且つ理性は必ずしも誤謬なしと云ふべからずとの主張に傾きたり。而して吾人の感情は是れ吾人天性の聲にして、理性の利己的計畫に相反するものなるが故に、公正なる指導者として吾人は之れに従ふべき

ものなりと論じたり、本世紀の後半に於ける思想界の運動は前者が智的貴族政治を形成するに至りたるに鑑み、一般人民の福利を増進せんことを期したり。

ヴォルテアは其耀灼たる智力と深遠なる合理論とによつて第一回の運動の主唱者となり、ルーソーは其の深刻なる感情主義と人民に對する大なる同情とによつて第二回運動の指導者となれり、ヴォルテアが人望を一身に集めたる所以は多數世人の思料せる處をよく言明したるにありとせば、ルーソーの人望は他人の感情を忖度し、最も完全に之れを發表したるが故なりと云ふことを得べし、最初の運動は知識の自由を得たりと雖も、利己的なるが爲めに社會制度の形式主義と專斷的權勢を寬宥したるは其缺點なり。

ルーソーは半ばは自己の感情に導かれ、半ばは平民に對する同情の念より迸りて、當時の明白なる社會の不均等に對し酷烈なる反對を起し、舊來の理論の法則に代ゆるに、自然に對する信仰、平

民の權利を重んずるの信念、人は自己に善を行ふべき天賦の力能を有すとの信仰等、新らしき福音を提供したり、當時ラブリュエールは帝王の壯麗貴族生活の華大驕奢、社會の艶麗等に對照せる一繪畫を畫きたり其畫の評に「男性女性の或動物が田野に散在せるを見るに、皆黒色或は飴色を帯びて日光に焼射せらる、彼等の限りある運命は彼等が不撓不屈の忍耐を以て掘りつゝ働きつゝある處の地なり、彼等は終に之れを脱する能はざるなり、彼等是一種の明瞭なる音聲を有す、又彼等の起立するを見るに其面人に類す、嗚呼誠に彼等は人なり」モーレーは此文を引證して更らに言を爲して曰く「ヴォルテアが嘗て此悲慘なる光景を目睹したりとは考ふる事能はず、眞に此畫をなさしめたるものはルーソーの聲なり、ルーソー出で、世の政治家、哲學者は其心中常に恐怖し憎惡しつゝ、ありし光景を想起し、人間相互の關係を改造すべき一大運動の幻想は遂に其腦裡より脱すること能はざるに至りたり、ヴォルテアの事業は之と異なり

即ち之れが準備先導をなしたるもの、云はゞ庶人をして理性の權威を解するに至らしめたるものなりき。

第十八世紀の後半に於けるルーソー一派の事業は、人に對する信仰を新たにし人生の新理想を作り、社會に一新精神を鼓吹し、人性を基礎とせる宗教を再興せんとしたるに在り、舊時代の宗教の教理と新自然主義とを執りて相比較する時は、其間に天淵の差違を認めずんばならず、神の力を信じ、假定せる神意に對し敬虔なる服従をなし、歡喜極りなく、言語に絶したる應報を望みたる是れ實に舊信仰の源泉なりき、然るに同胞に對する平等の愛、人性に對する確乎たる信念、熱烈なる正義の追求、進歩發達の熱望、如何なる應報も他人と共に受せんとする寛大なる満足、是れ新信仰の源泉なり。

ヴォルテア及びルーソーの代表したる唯理論的運動及び自然主義運動の相違點は、更に兩人の宗教に對する態度を見て知るべきなり、ヴォルテア與へず、又同情もなく只管知識ある社會を學び以て冷靜なる形式主義を奉じ、硬苦しき法則に従ふを以て道德とし、理性を以て思想界の指南車と仰ぎ、物質主義を以て道德上の標準となし、利己主義を以て行爲の原則と考へたり、ルーソーが文明を目して禍因殃原となせるもの實にかくの如き社會觀に胚胎したるを見るべし。(未完)

奥匈國銀行の外國爲換政策

久山寅一郎

中央銀行が外國金貨拂手形を保有し、多少の利殖を謀ると同時に、之を正貨準備に充つるの方策は所謂外國爲換政策又は金爲替政策(Devisen Politik)なる名の下に露西亞銀行、獨逸銀行、奥匈國銀行等に於て盛に行はる。固より各國信用發達の程度並に通貨に對する國民の觀念に相違ある以上は斯る方策が一般に適用せられ得べきや否やに就ては大に考慮を要す可しと雖も、前記諸銀行は常に此方策を利用して大なる利益を收めつゝあり。本稿は千九百九年六月の「エコノミック、ジャーナル」に於ける「The War of Money」氏の所論にして、參考に資す可きもの少

の主張する處はあらゆる宗教は信者にとりては幻想にして僧侶にとりては是れ虚偽を行へるものなり、自然主義の論者は啓蒙運動の懷疑思想にも反對し、且つ又舊教會の主義は正教徒の迷信として之を斥け、新らたに「自然的宗教」を建設して基督教の道德を網羅したるも、超自然的要素若干を斥けたり、吾人は自然的宗教に關しても亦懷疑思想に關しても共に批評をなさざるべし、只自然主義論者が、宗教は人間經驗の重要部分なるが故に全社會の重大事業として宗教を信じたるの一事を特記せざるべからず、革命運動會議の態度はよく之等兩運動の相違を説明するものと云ふべし、該會議は佛國民の信仰すべきものは、最高の實在と靈魂の不滅に在るを斷言し、信仰の定形としてサヴォイヤー、ヴィカー(エミール第四篇)の信仰告白を採用し、懷疑思想及汎神論を以て貴族主義なりとし永續すべきものに非ずと聲明せり。

ヴォルテア及び同論者の抱懷せる文明の意義によれば宗教を貶し、一般人民には何等の權利をも